

池田さんと富士山

富士山という山は遠くから見れば気高く美しい山であるが、近くで見れば何の事はない地肌のない秃山である。私は池田さんに一番近いものの一人である。閨房の秘事以外は一切知っているといても過言ではない。池田さんは富士山のように偉大な政治家であるのかも知れないが、私の池田観は近すぎるのでどうもあまり気高く美しく見えない怨みがある。私が池田勇人論を書くことは、池田さんにとっては一番迷惑なことだと推測する。

自由党は不思議にも官僚出身の黨員を多く抱えている。吉田をはじめとして池田、佐藤、増田、大橋、吉武、野田、橋本等吉田内閣の大臣の履歴に恵まれた人々を始めとして、新しいところでは青木、津島、岸、山崎、相川、迫水、その他多くの追放復活組を擁している。その中で池田さんは、たしかに異色ある存在である。今のところ一頭地を抜いている観がある。

池田さんは秀才であるかと言えば決して秀才ではない。五高から京大に進んだので、自らも赤切符の凡オコースを歩いたのだと言っている。それが故望月老の推薦で大蔵省入りをしたのだが、彼の同期（大正十四年組）にはキラ星の如く秀才がいて彼の栄進のコースは決して順調ではなく、

どちらかと言えば出世がおくれた方であった。それが幸いしてか、トップを争って進んでいた連中（山際正道、植木康子郎等）が追放にかかったが、彼はそれを免れた。そして主税局長から大蔵次官という彼が予想だにできなかった栄職にありついたのである。唯彼の官僚生活の中で二つの特筆すべきことがある。第一に彼は二十数年にわたる官僚生活を通じて終始税務畑にいたことである。途中満州国からもらいがかった時も断って行かなかつた。大蔵次官になるまでは一心に税の仕事に没頭した。それも中央、地方を通じて企画と現場の両方の体験を積んだ。しかも普通の学士には税務の実際をおろそかにする通弊があるのに、彼は会社の考課状を克明に勉強したり、税務署の調査簿をひっくりかえして仕事を覚えたりした。抽象的な観念論には一向に無頓着で、一途に具体的智識と技能を身につけることに精進した。この具体的知識と技能が後年の池田さんの骨格の一つになっている。

もう一つは彼が宇都宮の税務署長の時に世界的に稀な皮膚病に罹り五力年というものは、かゆさと闘いつつ病床に呻吟したことである。彼はこの闘病を通して、何かしら偉大なものに対する信仰心と苦しみに耐える強い意志力を養うことができた。これが今日の池田さんを造る素材の一つになっている。

こういつた事は、大抵の読者各位が或は御承知のことと思うが、それだけではまだわが池田さ

んがえがき尽くされてはいない。彼は鋭い直観力と強い連想力に恵まれている。意志力の強いのと併せて池田さんの魅力はそこにある。それは読書から来たつけ刃ではなく、自らの体験と構想から出たいわば手が見たい職人的なものである。従つてそれは必ずしも客観性をもつた正しいものばかりとはいえない。もとより誤りもないとはいえないし偏向もあり得ることである。しかしつけ刃でないだけに彼の実践や主張はなかなか強い。池田さんはまた一面荒削りの人で、従つて結論が早く演出が粗野である。度重なる放言事件等も演出の巧拙の問題であると同時に、他面結論を急ぐ性癖の現われでもある。

ところが池田さんは粗野であり放胆であるばかりかと言えば決してそうではない。なかなか細心な一面があり、見栄坊の半面がある。世渡りが決して下手な方ではない。吉田さんの絶対の信頼をかち得ている所以のものは勿論池田さんの強靱な実践力や義理がたさに負うものであるが、同時に吉田さんにアプローチするやり方は尋常の吉田詣でのアプレ政界人の比ではない。吉田さんという人は、あれでなかなか意地悪いというか妙にペコペコ御べつかを使いこなすラスプーチン型を容れる人ではない。世間には「吉田側近」等という言葉が出来て隠然たる勢力を形成し吉田政権の黒幕でもあるかのように云いふらす人が多かったが、吉田さんはそういう人のかいらいになるような人では決してない。よく人物を鑑別するし、その鑑別があやまっておれば因縁に

捉われなくて突っ放すだけの強さをもった人である。六十人も七十人も大臣を製造した人として余りよく言われてないが、私はむしろその人が内閣のためにならない国のためにならないとなれば、即座に罷免するという吉田さんの強さに敬服したい。情義は個人的であり大義は公のものであるからである。池田さんはその辺の呼吸をよく呑み込んでいたので、在来の吉田詣でのように見えるいたおべっかを吐かないというキメの細さを心得ている。

その池田さんが今では自由党の大きい柱になってしまつたし、財政の危局が叫ばれると池田財政に郷愁をおぼえさせるだけの信用をうち立て、ひよっとすると池田内閣も政界の日程に組まれるかも知れない情勢である。幸運といえは幸運であり、よくやったといえはよくやったといえる。

しかしながら、これからの日本をめぐる内外の情勢は決して生易しいものではない。もとより強い実践力のある政治家でなければこの危局を担当できるものではないが、しかしそれ許りではないけない。世渡り上手だという処生術だけでもいけない。滅私というか自虐というか、衆の憂に先んじて憂え、一身を挺して国難に当る底の人物でなければいけない。私は池田さんが大病から生命拾いをした当時の謙虚で無欲な心境に立還り、国難に身を投ずるといふ大きい飛躍と、つつましい精進を彼に希求して已まない。政治は人によつて具現されるものであるが、その生命は天与のものであるからである。(昭、二九・一)

欠点の美

一つの池田勇人観

あるとき、私は敬慕している松永安左工門老御夫婦から、お茶の接待を受けた。それはちょうど日曜の朝のことで、場所は国会に程近い御馴染の八百善であった。招かれたものは池田勇人氏をはじめ政界人や財界人数名で何れも夫人同伴であった。

何故松永老がこのような催しを目論まれたかという、それより前、松永老御夫妻が目出度い金婚のエージを迎えられたので、われわれが老夫婦の風雪の御労苦をねぎらうと同時に、それにあやかりたいという希望も手伝つて、一夜ささやかな祝宴を張つたのであるが、今回の茶会にはそのお返しという意味が含まれていたのである。

朝九時というのに、老夫婦はもとより招かれた一同は遅刻もしないで八百善に集つた。間もなく一同は草履をはいて未だ朝露がかわききらない庭石伝いに茶室に案内された。そこへ接待の介添役というので八百善の主人公が出て来て、出し物の花瓶や茶器や掛軸等の由来や因縁を説明された。大体茶器というものは古いものが珍重されると聞いていたが、御多聞に洩れず八百善の主人公がとり出した茶器は何でも鎌倉時代のものが多いようであつたし、松永老が態々小田原からもつてこられた茶器も随分古いものであつた。

ところが、どの茶器を見ても或は花瓶をとりあげて見ても、何れも不格好不齊一のものばかりで、焼きそこねたものとか塗りそこねたものが多い。中には一部かけたところをつくるつたものさえある。しかも、そのような謂わば「出来損ね」が無暗に珍重がられ且つ高価だといっているのであるから面白い。

なるほど古ければ古いもの程高いというのは一面理に叶っている。そのものが生産された時の生産費が如何に僅少なものであっても、複利計算によつてその現価を算出してみると随分高いものになりかねないのである。他面また古いものほど所謂稀少価値をもっているから、高価であっても別に不思議はない筈である。それにしても古いものの中でも、わざわざ不恰好なもの許りが何故珍重されるかということは近代の価値観からは、にわかに出てこないものである。

八百善の主人公は、這般の消息をさりげもなく、「それは欠点の美、というものですよ」といふ。なるほどうまいことを言ったものだ、とつくづく感じ入つたのである。

ところが欠点の美という言葉をじつとよく味ってみると、尽きせぬ興味が湧いてくる。大体人間というものほど完全でないもの、欠点の多いものはない。神様はよくも、このように欠点の多い人間を、とりどりに創造したものだと驚くのである。しかも聖書によれば、神様は人間を自己の姿に形どつて創造したとある。神様はつまり、その愛惜する唯一の子として人間を創造された

のだ。如何ようにも創り方があつた筈なのにその無限の可能性の中から、態々今日われわれがまのあたりに見るような姿に人間を創造されたのだから面白い。神様はその唯一無二の傑作として人間を創造し、人間の歴史を創出されたわけだ。

それほど神様が目をかけている人間は、謂わば欠点だらけというわけである。しかし私は、どうも神意の秘義が、この欠点の中に隠されているように思われてならない。もしも人間が、完全かまたは完全に近く創られていたならば、一体この世の中はどんな姿になるであろうか。恐らくそれは驚くほど退屈な世の中であるに違いない。第一、法律などというものは一切用事がなくなる。従つて裁判所や弁護士などというものが要らなくなる。また小説とか演芸等というものはその題材払底で困ることになり、政治家も失業を余儀なくされる。世の中は火の消えたように退屈で、無聊を凌ぐのに困つてくる。土台、完全といい、円満具足というような言葉自体が消え去つてくる。倫理というものがなくなるのである。人間はその技能を磨き、品性を陶冶する必要がなくなつてくる。それでは全くたまつたものではない。欠点というものは、そのように歴史の原動力であるわけだ。

賞 鑑 物 人

私は池田勇人氏とは永年、兄弟の間柄にある。従つて、池田さんの公私両面に亘る美点も欠点も知り尽しているといつても過言ではない。私が一口に池田さんを評すれば、彼は手のこんだ手

練手管に縁の遠い善良で単純な性質の持主であるが、如何にも生硬で欠点だらけのバランスのとれない人間であるといえよう。その証拠に彼が何でもなく実行することが、世間ではドギツクとられたり、彼があたりまえのこととして言つてのけたことが放言になつたりする。仮に池田財政にしても池田放言にしても、それが池田さんでなくて他の誰かが同じことをやつたり言つたりしたのであれば、世間ではそのように取上げなかつたであらう。ともかく池田さんはそれほど厄介な人間である。そしてそれは彼の美質に負うというよりも、より多く彼の欠点に負うところが多いといつて差支えあるまい。

その池田さんは、それにも拘らず、わが国の政界における異色ある存在になっている。私は、池田さんという人物を、つくづく鑑賞してみても、尽きない興味を覚える。人間を思い、歴史を回想し、政治を考えるにつけても、欠点に象徴される神意の玄妙さに今更のように驚くと共に、池田さんの生涯にまつる神意のいたずらにも考えさせられることが多いのである。(昭、二九・八)